

【 】	
氏名	山野 明男
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成17年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科産業社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	わが国における国営干拓地の地理学的研究
学位論文審査委員	主査・教授 内田 和子 教授 下野 克巳 教授 武村 昌介 助教授 北川 博史

学位論文内容の要旨

本論文は、第2次大戦後の大規模国営干拓地を研究対象として、干拓地の計画段階から現在までの時期を連続してたどり、入植した人々の環境への適応・対応の仕方と、その結果としての現在の干拓地の姿が形成された要因を地理学的に明らかにしたものである。本論文は査読付き学会誌に発表した3本の論文と文化科学研究科紀要等に発表した4本の論文を基本に、学位論文として整序したものである。分量はA4版202 ページである。

序論

本研究の目的と方法を述べ、既存の干拓地に関する研究の成果と課題を示す中で本研究の意義を示した。

第1章 農業政策の変化と干拓地の時期別対応

戦後の農業政策の推移と干拓地との関連を分析し、干拓地は農業政策の影響を大きく受けやすい地域であることを指摘した。同時に1946～90年までの干拓事業を分析して時期区分を行い、国営干拓地は造成面積の大部分を占めていることを明らかにした。

第2章 干拓地の概観と主要国営干拓地の地域分析

国営干拓地のうち造成面積が300ha 以上で10戸以上の入植農家が共同体を形成している19の干拓地をとりあげ、地域分析を行ったところ、これまでの干拓で取り残された自然条件の悪い湖面・海面に立地が限定されていることがわかった。この干拓地の位置と入植農家の営農の指標となる専業・兼業農家率に着目して、4つの干拓地を選定し、さらに干拓当初の計画が挫折して再出発した干拓地を加えて、5つの事例研究地域を抽出した。

第3章 大規模水田稲作経営の秋田県八郎潟干拓地（大潟村）の展開

専業農家率の高い干拓地である八郎潟干拓地はわが国最大の造成面積をもち、大規模土地配分がされている。ここでは米の生産調整政策への対応形態によって、入植農家が生産調整型と稲作主体型とに二分された。その要因は、入植農家の母村の営農形態と入植時期等である。

第4章 複合的農業経営の滋賀県大中の湖干拓地の展開

専業農家率の高い干拓地で、複合的農業経営である大中の湖干拓地では、米の生産調整によって水稲単作経営が大きく転換され、露地野菜栽培・施設野菜栽培・肉牛肥育・稲作・酪農・花き栽培の6類型の農業が行われるようになった。この多様な営農分化の要因は、入植農家の母村の営農形態と集落単位による協業組織等である。

第5章 工業化の影響が著しい岡山県児島湾干拓地七区の展開

第一種兼業農家率の高い干拓地である児島湾干拓地七区では、小規模土地配分がされ、所得の大部分を農業に依存しながら水島臨海工業地区の臨時雇いとして就労していた入植者が主体となり、ナス専作に成功し、ナス施設栽培の一大産地に成長した。入植農家全体としては、ナス主体施設栽培・その他の野菜栽培・転出入作・米麦主体・離農・転出の6類型となった。このように児島湾干拓地七区は工業化という外的要因に対応して、第一種兼業農家率が高く、ナスの専作がみられる。

第6章 都市化の影響が著しい愛知県鍋田干拓地の展開

第二種兼業農家率の高い愛知県鍋田干拓地は大都市名古屋の近郊に位置し、入植農家は耕種主体・畜産主体・兼業主体・離農の4類型に分類される。鍋田干拓地は伊勢湾台風後の継承入植者の離農、名古屋市域農家への土地所有者の変更、土地利用の変化等の都市化の影響を大きく受けていることが明らかになった。

第7章 大規模な土地利用変更を伴う岡山県笠岡湾干拓地の展開

当初の計画が変更されて再出発した事例で、1990年に完成した笠岡湾干拓地は、水田皆無に代表される大規模な土地利用計画の変更に起因して、入植当初から畜産主体型・耕種複合型・園芸複合型の3種類の営農がみられる。このような笠岡湾干拓地は、都市化・工業化の外的要

困を受け、道路計画を初めとする新たな土地利用変更を迫られている特殊な事例と考えられる。
結論

干拓地における自然的条件、入植者の入植時期・土地配分等の人文的条件等から成る内的要因と、米の生産調整政策・都市化・工業化等の社会的条件から成る外的要因によって、事例国営干拓地における人間の適応・対応の仕方には、干拓地毎の明らかな地域性が認められた。なお、干拓地特有の共通要因としては、厳しい自然環境への適応、入植者の入植時期・土地条件、母村における営農形態や生活様式の干拓地への移転伝播等が指摘できた。

学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、平成17年2月7日に学内審査委員4名によって行われた。審査結果は以下の通りである。

本論文は、わが国において第二次大戦後に造成された国営干拓地を対象として、約40年間にわたる土地利用や入植農家の営農の展開過程を通して、干拓地における人間の適応・対応の仕方を地理学的に初めて解明した点で価値ある論文といえる。

本論文の評価点として、まず次のような特筆すべき研究方法があげられる。それは、事例研究の対象とした5つの干拓地において、入植した全農家の営農と干拓地全体の土地利用の変化を、干拓地の計画段階から現在に至るまでの時期を連続してたどり、現在の干拓地の姿をもたらした要因を地理学的に明らかにしたことである。本論文が地理学の原点ともいえる長年の綿密な地域調査に基づいていることは大きな評価点である。

第2に、これまでの干拓地研究は特定の事例に関する時期を限った研究が多く、すべての干拓地を視野に入れた上で抽出した主要な干拓地を、長期的なスパンで研究したものはない点で、本論文の意義が認められる。また、戦中から戦後にかけての深刻な食料難対策に果たした干拓地の役割や現代における貴重な緑地空間である干拓地の将来展望を考える上でも、干拓地の土地利用や営農の展開要因を明らかにしたことは意義あると考えられる。第3に、本論文の結論として、干拓地における人間の適応・対応の形態は、そこに作用する外的要因と内的要因の組合せの違いによることを指摘している。たとえば、児島湾七区干拓地では、近隣に形成されたコンビナートの臨時雇用という外的要因と、劣悪な水利・地質条件、小規模な土地配分という内的要因がいまって兼業化が促進され、岡山市との近接性からナス栽培産地となった。これらの要因のうち、コンビナートによる工業化がもっとも大きな影響を与えた要因と考えられる。このような要因分析は換言すれば、干拓地毎の地域性の発見であり、本論文は地理学の重要な命題の1つである地域性の追求を干拓地を例にして示した点で評価できる。

一方で、審査員から以下のような質疑や意見があった。
全国的な干拓地の類型に関して、海面干拓の多い地域と湖面干拓の多い地域の境界や湖面干拓の定義に関する質疑があった。また、事例干拓地を抽出する指標としての農家の専業兼業率のデータ年は、最新年より干拓地の完成年度が望ましいとの指摘があった。さらに、干拓地における人間の適応・対応に影響を与える要因として、人間的側面から入植者の年齢・家族構成・学歴や行動パターン・行動マインド等の面からの分析も行うとより深い考察が可能になるとの意見もあった。これらは十分に傾聴に値するものであり、今後の発表の機会等において、加筆や修正を期待したい。特に、最後の意見については、本研究をこの先いっそう深化させるために重要な指摘と認識した。しかし、これらは今回の審査の根幹を揺るがすものではないと判断した。

以上の審査結果から、本論文は博士の学位論文として十分なものとして全員一致で合意した。